

世田谷と100年

国士館は、1919年、建学の地・東京麻布（現港区南青山）から、世田谷の地（現世田谷キャンパス）に移転した。隣接する松陰神社には、吉田松陰が祀られており、創立期の国士館が掲げた教育理念「大正維新の松陰塾」に適した理想的な環境であった。この地に見守られた学園は発展を遂げ、国士館は世田谷地域と共に一世紀にも及ぶ歴史を育んできたのである。



国士館のシンボル「国士館大講堂」（世田谷キャンパス）

創立期の世田谷キャンパス

世田谷地域は江戸近郊農村として歴史を刻み、明治・大正期には未だ「武蔵野」の風景を色濃く残していた。烏山川沿いの高台に位置した国士館の周辺には、豊かな自然と田園風景が広がっていた。

1919年の移転当初、教室として建設された国士館大講堂は「宏荘な御殿造りの一大建築」と評され、世田谷キャンパスは「世田谷松陰祠畔の大宮殿」と謳われた。教職員と学生が自給自足の共同生活を送る「国士村」という独自の教育は、当時の国士館ならではの学風を形成した。



国士館環境図

1932年頃 国士館とその周辺の環境



1919年 北東から望む国士館と田園風景

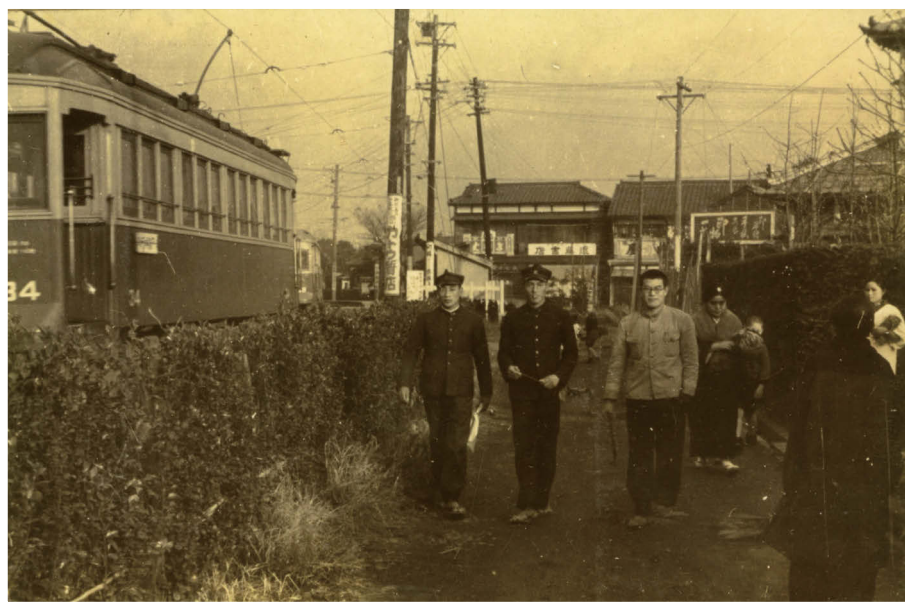


1926年 校内の菜園（大講堂西側）と国士村の生活

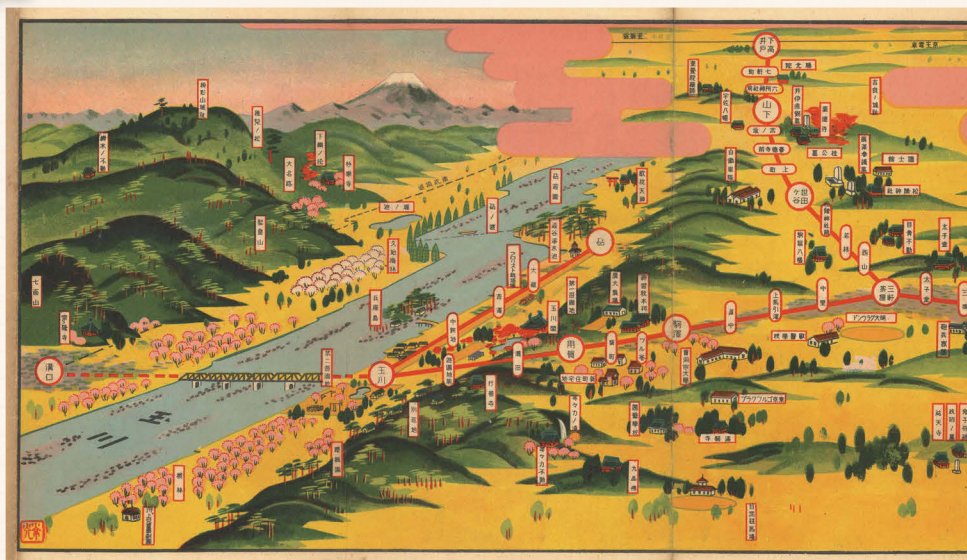
鉄道開通と地域の活性化

関東大震災以降、世田谷地域は、農村から東京近郊の郊外住宅地へと変貌を遂げる。地域の交通網が整備され、農村の市街地化は一層進み、1932年には世田谷区が誕生する。

国士館は、周辺地域の宅地化によって増加した商家への対応、高等教育機関の拡充を期して、商業学校・専門学校などを創設した。諸学校の特徴である地域教育への貢献や武道教育のカリキュラムは、現在の国士館における地域教育・生涯学習への貢献、国士館スポーツの発展につながっている。



1939年頃 銭湯帰りの学生と世田谷線



豪徳寺や松陰神社と並び地域のランドマークとして描かれた国士館
金子常光画『玉川電車沿線案内図』（玉川電気鉄道株式会社発行、1925年5月～1927年3月）



1940年頃 国士館商業学校の珠算授業

戦後の町並みとキャンパス整備

戦後の復興期から高度経済成長期にかけて、世田谷地域でも都市整備が進み、キャンパス周辺の自然環境も変化した。大学周辺の駅前商店街は繁栄をみせ、地域住民や学生の憩いや交流、娯楽の場となり、まちにさらなる活気をもたらした。

国士舘では、1998年の創立80周年記念事業などを契機として、校舎とその周辺整備が進められた。キャンパス全体の一体的な活用を実現し、誕生した近代的な新校舎は地域にも開放された。



1965年頃 小田急線梅ヶ丘駅



1976年 国士館初のオリンピックメダリスト誕生を祝う松陰神社通り商店街



世田谷区役所通りのトンネル整備とキャンパス（区役所側からキャンパスを望む）
2000年（右）・2001年（左）

烏山川の暗渠化

(上) 1963年

(下) 現在

烏山川は、国士館の創立以前からキャンパス北側を流れていた小河川である。学生たちは、烏山川に架かる「勝橋」を渡り、小田急線梅ヶ丘駅方面に向かった。1965年以降に暗渠化、現在は整備されて公園「烏山川緑道」として、その面影を残している。



梅ヶ丘校舎の誕生

(上) 2005年頃

(下) 現在

2008年、世田谷校舎から烏山川を隔てた都立高校跡地に梅ヶ丘校舎を建設（写真右側）、川の高台に位置する世田谷校舎と低地の新校舎はブリッジでつながれ、校舎間を移動する際は烏山川を橋で渡っている気分を味わえる。